

— 資 料 —

The Doshisha Hospital Messenger

京都同志社病院機関誌『おとづれ』

—第1~3号(1893年)の記述内容—

The Doshisha Hospital Messenger 'Otozure', No.1-3 (1893)

岡山寧子¹⁾

Yasuko Okayama

抄 録

本稿は、The Doshisha Hospital Messenger 京都同志社病院機関誌『おとづれ』(以下、病院機関誌)第1~3号の全容から当時の同志社病院・京都看病婦学校(以下、病院・看病婦学校)の状況や機関誌発刊の意義を探ることを目的とする。主な史料は病院機関誌第1~3号の3冊で、第1号(12頁)は1893(明治26)年3月、第2号(14頁)は同年5月、第3号(16頁)は同年7月に発刊され、発行所は私立同志社病院、編集人竹内種太郎、発行兼印刷人堀俊造、第2・3号には大阪福音社印刷であった。

病院機関誌発刊には、病院・看病婦学校が創立7年目を迎え、診療・看護教育共に軌道に乗り、量的にも質的にも充実しつつある状況を関係者や地域の人々に広く伝え、これから巡回看護などの地域医療を強化し、さらにキリスト教を広めようとしている意向がうかがわれた。主な記述内容は、論説と記事で、論説では病院・看病婦学校のJ. ベリーやH. フレーザーなどによる医療・看護、健康教育や保育など健康に関連する幅広い内容を一般の人々にもわかりやすく記述していた。記事では病院・看病婦学校の状況、例えば病院の運営状況、巡回看護と施療所新設、看病婦学校入学関連や卒業生の動向、伝道、英文年報の発刊、卒業式挙行などであった。中でも、卒業式の記述では、卒業生に対して看護専門職としての自立に向けての質の高い饒別の言葉が示されていた。

以上から、この病院機関誌の意義は、広く医療・看護知識を一般に普及したこと、病院・看病婦学校の実績を広く社会に伝えることがさらなる発展への戦略の1つであったこと、キリスト教伝道の活動推進の手段であったこと、そして在校生や卒業生の交流的な意味を持っていたことが考えられた。J. ベリーが帰国し、その後の病院・看病婦学校が大きく変化していく中で、この病院機関誌は当時の同志社における医療や看護教育活動最盛期の成果の一端を知る貴重な史料であり、その発刊は病院機関誌として先駆的な取り組みであったと考えられる。

キーワード：同志社病院、京都看病婦学校、機関誌、伝道、J. ベリー

I. はじめに

今から約130年前、1886(明治19)年の秋、同志社の創立者新島襄により設立された同志社病院・京都看病婦学校(以下、病院・看病婦学校)での診療および看護教育が始められた。それは、日本で2番目に早い開始であった。当初、京都御苑西側(現在のKBS京都付近)の宣教師館を仮建物として、宣教医ジョ

ン・ベリー(John Cutting Berry, 1847-1936:以下、J. ベリー)を病院長、リンダ・リチャーズ(Melinda Ann Judson Richards, 1841-1930:以下、L. リチャーズ)を学校監督者に迎えた。看病婦学校が正式に京都府から設置認可を受けたのは1887(明治20)年8月、新病院や看病婦学校の開業式が同年11月に盛大に行われ、翌年には初めての卒業生4名を輩出した。L. リチャーズにより始められた看護教育は、その後、イー

1) 同志社女子大学看護学部 Faculty of Nursing, Doshisha Women's College of Liberal Arts

ダ・スミス (Ida V. Smith), そしてヘレン・フレイザー (Helen Eliza Fraser: 以下, H. フレイザー) とアメリカの宣教看護婦により引き継がれた。しかし, その開始から約 10 年後, 病院・看病婦学校は存続の危機に直面した。1897 (明治 30) 年, 同志社は病院と看病婦学校の管理を, 当時同志社病院産科の医師であった佐伯理一郎 (1862-1953: 以下, 佐伯) に委ねた。熊本出身の佐伯は, 新島襄らの影響を受けてクリスチャンとなり, 京都にて信仰に基づいた医療・看護教育に生涯を捧げた人物である。佐伯は実質的に病院・看病婦学校の運営をすすめ, 併せて京都産院や佐伯病院を開院した。1906 (明治 39) 年には, 同志社病院は閉鎖され, 看病婦学校は佐伯病院内に移転, 同志社の手を離れた。その後約 50 年間, 1951 (昭和 26) 年の閉校まで, 佐伯の尽力により京都看病婦学校の名前は受け継がれた。卒業生は 1000 人に近い。

筆者は, 今までに病院・看病婦学校の諸規則, 京都看病婦学校 50 年史 (1936 年), リチャーズの回想記 (1911 年), アメリカン・ボードへの公式事業報告書の病院・看病婦学校第 1～9 年次報告書 (4・5 年次は未確認, 1887～1896 年) などから, 開設初期の病院・看病婦学校では, 創立者新島襄の意向に沿って, キリスト教を基盤とした, 欧米からの直輸入的ではあるけれども先進的で幅広い診療・看護教育が実践されてきたことを確認してきた (岡山, 2010)。また, 同志社の手を離れ, 「佐伯の学校」となった後も, その精神は引き継がれ (遠藤・山根, 1984), 卒業生たちの様々な活動記録などから看病婦学校の教育成果を探ってきた (岡山, 2007)。中でも, 同窓会機関誌には, 卒業生名簿や卒業後の消息・動向などが詳細に記載されており, 卒業生による幅広い分野での活躍を確認することができる。この同窓会機関誌の発行は, 第 1 回の卒業生輩出から 12 年後の 1900 (明治 33) 年からである。この年に京都看病婦学校の同窓会が正式に発足, その活動の一環として同窓会誌の発行が始まったのである。同窓会機関誌は, 創刊からほぼ 1 年ごとに 42 冊発行されており, 最終号は 1943 (昭和 18) 年である (岡山, 2008)。その同窓会機関誌創刊号に, 佐伯は,

「顧みれば明治二六年中『同志社病院おとづれ』生まれてより同二十八年には『同窓の音 (おとづれ)』出でたりと雖も甲はベルリ氏歸國のため三四回にして, 乙は學校變遷のため僅かに一回にして何れも其呼吸止むる不幸に…」

と述べ, 同窓会機関誌はその病院機関誌を継承した形で発行したとの記述がある (京都看病婦学校同窓会, 1900, pp.1)。また, 病院・看病婦学校第 7 年次報告書 (1893 年) などには, 病院機関誌が地域と病院を結ぶ機関誌として紹介されていたが, その詳細は明らかではなかった。

このたび, The Doshisha Hospital Messenger 京都同志社病院機関誌『おとづれ』 (以下, 病院機関誌) 第 1～3 号が同志社女子大学史料センターに寄贈された。そこで本稿では, この病院機関誌の全容を紹介し, その記述内容から当時の病院・看病婦学校の状況や機関誌発刊の意義を探る。

II. 研究方法

主な史料は, 病院機関誌第 1～3 号の 3 冊を用いた。今回確認できたのは, 第 1 号が原本, 第 2 号と 3 号はコピーである。いずれも, 病院・看病婦学校での診療や看護教育開始から 7 年後の 1893 (明治 26) 年に発刊されている。佐伯が, 病院機関誌は 3 号発刊後にベリ帰国のため中止となった (京都看病婦学校同窓会, 1931, pp.507) と述べていることから, この 3 冊が全てと考えられる。本報告は, 本史料の所蔵先の許可を得ている。また, 現在の呼称「看護師」について, 本報告では歴史的な存在としての「看護婦」または「看病婦」を用いた。

III. 病院機関誌第 1～3 号の発刊

病院機関誌は, 第 1 号が 1893 (明治 26) 年 3 月 7 日, 第 2 号同年 5 月 27 日, 第 3 号同年 7 月 17 日と 2 ヶ月毎に発刊されている。病院機関誌のサイズは A 5 判で, 第 1 号 12 頁, 第 2 号 14 頁, 第 3 号 16 頁の冊子である。表紙の上半分は The Doshisha Hospital Messenger 京都同志社病院『おとづれ』号数, 出版の日付が西暦と和暦で, 下半分は第 1 号では「発刊緒言」, 第 2・3 号には「論説」が記されている。いずれも, 最終頁の下半分に, 目次 (英文・和文), 発行年月日, 発行所, 編集人, 発行兼印刷人などがあり, 発行所は私立同志社病院, 編集人竹内種太郎, 発行兼印刷人堀俊造, 第 2・3 号は大阪福音社印刷と記述されている (図 1)。

編集人の竹内種太郎 (1863～1893) は, 同志社出身の伝道師で, 1893 (明治 26) 年に看病婦学校教授兼伝道師となるが, 同年 10 月病死している。その妻である文も看病婦学校に勤務したが, 夫の死後故郷の津山に戻り, 長年女子教育に尽力した (中西, 2009)。



図1 The Doshisha Hospital Messenger 京都同志社病院「おとづれ」第1(左)～3(右)号の表紙

発行兼印刷人の堀俊造(1847-1926)は、岡山出身のクリスチャンの医師で、J. ベリーの招聘に応じて同志社病院の開院から約10年間勤務し、J. ベリー帰国後しばらくは病院代表者としての役割を果たした(本井, 2011)。

なお、この病院機関誌の発行部数は不明ではあるが、配布先は外来や入院患者、退院した患者、医師や看護教員、看護学生、卒業生などの医療関係者、キリスト教教会員など、病院や看病婦学校に関係した人々であった。これらの人々へ「病院からメッセージを伝えるためのもの」という意味で、Messenger(使者)という名前になったようである(徳川, 1998, pp.138)。

IV. 病院機関誌発刊の目的

病院機関誌発刊に至るまでのいきさつやその理由は、第1号の「発刊緒言」に「今回本誌を刊行するに當り、吾人は只ここに本誌の必要を生じたる所似を略述して発刊の緒言とすべし」とあり、次の2点挙げている。

一点目は、

「抑も私立同志社病院、及び看病婦学校の京都の地に起りてより、既に五星霜、今や内外の諸事稍々整備し、醫員職員等各其人を得て、患者の来院するもの年々其數を増し、看病婦学校の如きも創立以後來學するもの前後數十名、而して當今既に其業を卒え、各地の病院及び私人の家に聘せられて、實際の働きに従事する者少からず、院内院外に於ける慰問傳道の如きも、主任者の熱心と親愛により、其効果次第に顯著ならんとし、又頃者市内巡回看護の事に着し、出張施療所を新設する等、事業日を逐ふて複雑に趣くを以て、此に一の機關を設け、各種事業の成績を

報告し、内外自他の事情を通報すること、極めて必要の事なれり、これ本誌を發刊する所以の一なり。」

二点目は、

「又本院設立の趣旨は固より榮利のためにあらず、『己のごとく汝の隣を愛すべし』と云ひ、又『凡て人に施られんと欲することは、汝また人にも其如くすべし』と云へる、基督の聖訓に遵ひ、主の愛に勵まされて、醫療及看病の事に従事するものにして、只一時人々の疾痛を愈し、病苦を救ふのみならず、本院に來り治を受くる人、及び其家族をして、人身構造の靈妙なるを覺らしめ、生を衛り身を保つるの道を教へ、之を慰め之を諭し、又基督が其病の癒されたる者に向つて『見よ汝既に癒たり、行再び罪を犯すこと勿れ』と宣ひしが如く更に靈生の尊重すべきを知らしめ、靈の醫療者、永生の主あるを悟に至らしめんことを希望す、これ本誌を發刊する所以の二なり。」

これらから、病院機関誌を通して、病院・看病婦学校が7年目を迎え、診療・看護教育共に軌道に乗り、量的にも質的にも充実しつつある状況を関係者や地域の人々に広く伝え、これから巡回看護などの地域医療を強化し、さらにキリスト教を広めようとしている意向がうかがわれる。

V. 病院機関誌の主な記述内容

病院機関誌各号の目次から大別すると、内容的には「論説」と「記事」である。

1) 医療・看護に関する論説

医療の面では、J. ベリーによる「気管支加答亞兒

に就いて」(第1号)、「日本に於ける近視眼」(第2号)、川本恂蔵の「赤児の食物に就いて」(第2・3号)、佐伯の「各國における授乳時の長短」(第1号)、「腹壁切開に於ける看護法」(第2号)の記述であった。看護の面では、H. フレザー(成瀬シズ訳)による「病室の通気法」(第1号)では換気の意義と効果的な換気方法を解説し、通気法の3箇条を挙げている。また「眼炎について」(第2号)は、眼炎の症状や発症時の洗浄方法、予防法など早期発見治療、予防的な看護を詳細に記述している。いずれも、専門的ではあるが、一般の人々にもわかりやすい表現で、治療面だけでなく疾病予防や健康教育や保育など幅広いケア内容となっている。なお、川本恂蔵(以下、川本)は、クリスチャンの小児科医師で、当時同志社病院の副院長(J. ベリー帰国後に院長)として、看病婦学校での教育にも携わっていた。

2) 病院・看病婦学校に関する記事

病院機関誌発刊前年と発刊当時の病院・看病婦学校の運営や行事、伝道の状況などを詳細に記述している。

(1) 病院関連

①病院の運営状況報告

病院の運営状況として、まず患者数について、第1号には1892(明治25)年1～12月の患者総数など、第2号には1892(明治25)年4月～1893(明治26)年3月の入院患者総数や疾病統計などの記述がある。1年間の入院患者が327名(入院日数は延5,542日)で、外来患者は新・旧あわせて11,768名、その前の年より増加とある。疾患は、消化器病、神経系、呼吸器病、皮膚・筋病などである。

第2号には病院の収支について、1892(明治25)年4月～1893(明治26)年3月までの収入は6,183円84銭6厘、支出は6,634円14銭4厘で、詳細な内訳も示されている。赤字ではあるが、施薬料などが寄付金で賄われているとある。その他に、病棟増築として、京都はじめ各地方に住む外国人のための外人用病室の新築を挙げている。また、第2号に同志社病院患者規則の中にある入院手続きの方法や入院料金、保証人の必要性、併せて退院手続きの方法など、また外来患者診察局規則から外来診察の受診方法や診療料、受診時のマナーなどを抜粋、わかりやすく具体的に記述している。

②巡回看護開始および施療所新設

第1号発刊と同時期に開始した巡回看護について、

その目的や心得を詳細に記述している。その目的は、次の3項目である。

「第一条 巡回看護婦は主任醫師の命により患家を訪問看護するものとす

第二条 巡回看護婦は患家の主婦及其他看病者に實地看護法の要旨と患者に與ふる飲食物の調理方を授くるものとす

第三条 看護婦は傍ら基督教の眞理を發揚しその實効を現はし斯道より起る所の安慰を患者に與ふることを努むべし」

その実際は、看護学生2年生が交代で訪問し、本校々監が責任を持つとある。巡回看護の心得として、巡回看護は夜間はなし、無報酬、主任醫師の指示に従う、病床日誌記載、全ての患者に親切丁寧に看護、家族に対してキリスト教主義の道徳をもって実地看護法や衛生教育を行うなどがある。

さらに、その巡回看護の拠点となる同志社病院出張施療所について、看病婦はその施療所を中心に巡回し、病者を訪問し看護を行い、必要時は患者を施療所に導くこととあり、毎週2回J. ベリーと川本が出張施療を行うとある。出張施療所は、京都市上京区新富小路仁王門に新築の愛隣舎とある。

(2) 看病婦学校関連

①看病婦学校入学関連や在学生試験実施と卒業生の動向など

第2号に、学校への入学要領として、入学志願者は毎年9月10日までに医師の診断書と申込書を添えて申し込むこと、入学条件は満22歳以上で普通教育を受け、身体健全、品行方正、観察敏捷、物事に綿密な女性、入学後全身全力を投じる決意のある者とし、仮入学期間があること、学費は1ヶ月約3円(キリスト教信者であれば学費補助)などがある。また、同号に、3月に実施した在学生の試験状況として、1年生は聖書、生理・解剖、普通看病婦法など、2年生は包帯、小児看護法、産婆学、聖書などの試験を実施、全員が合格、2年生は全員卒業とある。あわせて、開設から36名の卒業生を輩出したが、その後の進路状況を名簿形式で紹介しており、卒業生の多くが母校や京都などの関西圏、中には東京や北海道、福岡などで従事とある。また、第1号にH. フレーザーの父親からの寄付で、1階に教室、2階に学生寮を増築したとある。

②看病婦学校での伝道や英文年報の発刊

第1号に、看病婦学校の伝道部の活動や当時聖書などを教授していたイライザ・タルコット（Eliza Talcott）による説教の一部が記述されている。また、彼女を中心に伝道部の活動がなされ、入院患者や退院者の家を訪問し、永眠が近い患者への世話、毎週の説教、日曜学校、祈祷会など、積極的な伝道の様子が示されている。第2号には看病婦学校伝道部年報として、1年間の伝道活動が報告され、日曜学校出席者は総数3,234名（週平均63名）、説教聴衆総数は1,782名（週平均35名）、火曜日集会出席者数710名（週平均17名）とある。

また、アメリカン・ボードへの公式事業報告書の病院・看病婦学校第7年次報告書の発刊について、今回は病院と学校、職員や学生の写真などの挿入、病院機関誌の発行や巡回看護の紹介など例年になく充実した内容であり、これらの事業が少しずつ発展していることを報告している。

③第6回卒業式と職員送迎親睦会

第3号には、6月28日に挙行的第6回卒業式の模様が詳細に記述されている。そのはじめに、

「今其概況を報ぜんに國旗を交叉し庭前に數十の救燈を懸け列ね所々にアーチを造れり進んで式場に入れば正面旭日の旗と共に高く教育勅語を掲げ下に故總長新島先生の寫眞を安置し右方には當年卒業生の標語たる『神者我等之盾』なる文字を黄白の菊花もて現わしたる大なる盾形の額を掛け」

とある。卒業生は10名、会場は看病婦学校講堂である。式次第は、合奏、聖書朗読および祈祷、唱歌、文章、演説、告別の文章演奏、袂別歌（神は我等の盾）、袂別の辞（理想の看護婦）、誓約、卒業証書授与、祝文、唱歌、祈祷であった。卒業生からの祝辞披露もあり、卒業式の後には茶話会が開かれ、同志社関係者など約150名の参加、大変盛会であったとある。

また、「東京慈恵醫院長高木兼寛」と「勲三等醫學博士北里柴三郎」からの祝辞、「神戸多聞教會牧師長田時行」の「卒業生への勧め」、川本「卒業生に告ぐ」、H. フレーザー「理想の看病婦（卒業生諸姉の爲に）」を演説筆記にて記述している。

川本は、医師と看病婦は車の両輪のように協力すること、医学の進歩と共に看護もあること、看病婦学校の卒業生としての誇りと責任をもち、看護が高尚で貴重な職業であることを自ら示していくこと、「神は我らの盾」を忘れずにキリストの心をもって世に立つこと

が重要と饒別の言葉を送っている。

H. フレーザーは、「余は今爰に理想的看病婦とは如何なるものなるかその性質を述べ試みに之を諸姉の前に書き出し見んとす」として、7つの項目に沿って詳しく記述している。すなわち、

- 「第一 理想的看病婦は其職務を重んず
- 第二 理想的看病婦は全く己を忘れて働く
- 第三 理想的看病婦は又同情の念に深し
- 第四 理想的看病婦は常に己の看護すべき種々の病者に對し能く之を適應したる接遇を為す
- 第五 理想的看病婦は其職務を為すに最も簡便ある方法を用いんことを學ぶ
- 第六 理想的看病婦は何れの患家に至る曾て己が經歷し若しくは他人の實見したる所の事を語らず
- 第七 理想的看病婦の備ふる特質中尚一の大切なる事は常に其技能を研かんことに心を用ひ又己に得たる所のものをも失いざらん事を勉む」

である。そして最後に、

「…世に有用なる業を執り正しき生涯を送りたる先輩の後を慕い諸姉の目前に最も高尚なる標準を定めよ然らば其生涯は歡喜に充ち又他人にもその歡喜を分かち與ふるを得べし祝福は諸姉の上に有り勝利に其冠たるべし今諸姉我等と分かるるに臨み希くは記せよ親愛なる友ありて深く諸姉の幸福と健康とを祈れることを」

と締めくくっている。また、卒業式では看病婦の誓約を卒業生全員で述べたとある。看病婦の誓約は、

「醫動の鼻祖『ヒポクラテスの誓』なるものあり古來醫師の金戒となり後世醫師たるもの此に因りて裨益を得ること少しとせず現今も尚歐米醫科大學卒業式の時に當りてヒポクラテスの誓を用ふるもの少なからずわが看病婦學校に於ても其誓に則り少しく之を變更して看病婦の誓約なるものを定め卒業時に當て公衆の前に宣誓せしむるを例とせり今茲に誓約の全文を掲ぐべし」

と説明した上でその全文を掲載している。

「吾儂今ニヶ年ノ就業ヲ卒リ看病ノ聖職ニ從事セント

スルニ當リ茲嚴肅ナル心ヲ以テ左ノ諸件ヲ守ラン事
ヲ誓約ス

第一 吾儂ガ看病學ニ就テ得タル諸ノ知識ハ擧ゲテ
我同朋ヲ益シ病者ノ苦ヲ救フタメ用ヒ之ガ為
メニ我カト我心トヲ所盡スベシ

第二 吾儂ハ病者ニ對シテハ回復救護ヲ以テ主一ノ
目的トスベシ

第三 吾儂ハ己ガ看護セル病者ノコトニ就キテ我職
務ノ為ニ知リタル所ノ秘密ハ如何ナル事情ア
リトモ之ヲ他人ニ洩スコトナカルベシ

第四 吾儂ハ決シテ此貴重ナル職務ヲ汚スコトヲナ
サズ正直ト忠實ヲ以テ世ニ處シカヲ盡シテ此
職業ノ榮譽を圖ルベシ

京都同志社病院看病婦學校第何学年卒業生 何誰」

さらに、第6回の卒業式挙行の翌日夜、看病婦学校講堂にて退職職員と卒業生、新職員のための送迎親睦会開催についての記述がある。その次第は、賛美歌、祈祷および開会の辞(堀)、送別の辞(在学生)、答辞(卒業生や退職職員など)、唱歌、歓迎・送別の辞(J. ベリー)、卒業生への言葉(佐伯)、答辞(新職員)、唱歌、祝祷(小崎弘道校長)である。来客は100名余りで、盛会だったとある。

VI. 病院機関誌発刊の意義

病院機関誌第1～3号から、当時の病院・看病婦学校の状況を概観すると、病院においては経営的には苦しかったものの、患者数は年々増加し、病床増設、巡回看護開始、施療所新設などキリスト教に基づく地域医療をさらに積極的に取り組もうとする姿勢が鮮明にみてとれる。また、看病婦学校においても3人の来日宣教看護婦によって引き継がれた先進的な看護教育は、卒業生たちの動向などから当時の医療の発展に繋がっている様子がうかがえる。中でも、第6回卒業式での各先生方の饒別の言葉には、当時の看護専門職としてのあるべき姿を、具体的にしかも現代の看護倫理にも十分対応できる内容(手島、2016)を示しており、看護の本質をしっかりと踏まえた看護実践や教育の質の高さがしのばれる。また、当時アメリカでも斬新であった「看病婦の誓詞」を卒業生が朗読したというのも、この時期は日本でもかなり早いと考えられる。これら看護についての詳細な記述に加え、学校への入学方法、試験や卒業式の様子、校舎増築などを記述しており、看病婦学校開設から着実に発展し、社会的にも広く貢

献していることを明確に示している。それらの記述がかなり具体的であり、詳細であることから、学生を広く募集するための広報を意識したものとも推測される。これは、当時学生数は少しずつ増加していたものの、地域医療への拡大など、看病婦養成をさらにすすめたという積極的な姿勢を示しているものと考えられる。

このように、病院機関誌では、病院・看病婦学校での診療・看護教育が開始から約7年が経過して、開設当初の目的を守りながら、大きな発展の様相を示している。佐伯は、同窓会機関誌創刊号の京都看病婦学校略史の中で、病院機関誌発刊前年の1892(明治25)年は、過去だけでなく将来においても、恐らく病院・学校の全盛時代であったと評価している。そして、病院機関誌の発刊はその発展を助けるものであると述べ、病院・看病婦学校に寄与するために機関誌発刊の必要性と重要性を示唆している(京都看病婦学校同窓会、1900, pp.28-29)。

改めて、この病院機関誌発刊の意義は何であったのかを考えると、まずは、医療・看護教育活動が徐々に軌道に乗り、充実してきたことに加え、地域医療事業を推進しようとする中で、病院・看病婦学校での医療や看護教育の実績を広く社会に伝えていくことで諸活動のさらなる発展をめざす戦略の1つであったのではないかと考えられる。アメリカン・ボードへの病院・看病婦学校第7年次報告書にも、患者は病院に入院しても、その期間は短く、退院後も何らかの医療的な援助が必要であると考え、病院機関誌の発行を開始した(徳川、1998, pp.140-141)とあり、その実績を広く伝え、地域医療事業を進めようとした積極的な姿勢がうかがえる。

二番目には、キリスト教の伝道活動推進が挙げられる。各号に伝道活動を具体的に紹介している上に、論説では、医療・看護、健康教育や保育など健康に関連する幅広い内容を一般の人々にもわかりやすく記述しており、人々自身が健康を自ら守ることができるような働きかけの重要性を示している。それがキリスト教精神に基づくものであることを説いており、あわせて地域医療事業を通して、キリスト教伝道をさらにすすめたという意図を示すものと考えられる。

三番目として、看病婦学校の学生や卒業生の交流の場としようとしていたことが挙げられる。後年、佐伯は同窓会機関誌の中で、

「明治廿六年四月『同志社病院おとづれ』という雑誌が出版せられ其主筆がドクトル、ジョン、シー、ベリー

氏(当時の同志社病院長)、川本恂蔵氏と余とが其補佐であった。定期刊行ではなかりしも隔月に出版して、三號を出せる後其年の十一月ドクトル、ベリー氏が歸米せられしを以て中止した。此雑誌の目的は主として京都看病婦学校(同志社病院内に在りし)の卒業生(廿六年六月迄に總計三十八人内産婆を兼ねたる者十八人)の通信機關であった。」

と記述している(京都看病婦学校同窓会, 1931, pp.507)。このことから、J. ベリーが中心となつてすすめていた病院機関誌は、病院・看病婦学校活動の単なる広報誌という意味だけでなく、看病婦学校の在校生や卒業生の状況を知らせ合う交流的な役割を担うことも意図されていたと考えられる。

VII. おわりに

以上のように、1893(明治26)年の約半年間、3冊のみの発行ではあったが、病院・看病婦学校の発展への関係者たちの熱いおもいが込められた結晶として、この病院機関誌が発刊されたといつても過言ではない。その一方で、創立者新島襄の死後、病院・看病婦学校の発展を支えてきたアメリカン・ボードと同志社の関係が急速に変化していく中で、病院・看病婦学校の存続問題が起こりつつあり、将来に向けての不安が大きく膨らんでいった時期でもあった。J. ベリーはじめ関係者は、その不安を払拭するためにも、病院・看病婦学校の発展ぶりを社会に広くアピールしていきたいという意向も含まれていたのではないかと推測される。しかし、この不安はだんだん現実味を帯びてきていた。責任者であったJ. ベリーの思いがけない帰国はその象徴的な出来事であった。そのために、病院機関誌は廃刊となった。この数年後、病院は閉鎖され、看病婦学校は同志社の手を離れ、佐伯が引き継いでいくのである。そのような変遷の中で、この病院機関誌は、当時の同志社における医療や看護教育活動成果の一端を知る上での貴重な史料であり、その発刊は病院機関誌として先駆的な取り組みであったと考えられる。

謝辞：本論をまとめるにあたり、ご助言頂きました本井康博先生、依田和美先生に深く感謝申し上げます。なお、本論に関して著者は開示すべき利益相反はありません。

文 献

- 遠藤恵美子, 山根信子(1984): 佐伯の学校の卒業生たち～京都看病婦学校・京都産婆学校～. 125-165. 東京: 非売品.
- 京都看病婦学校同窓会(1900): 発刊の辞(佐伯理一郎). 同志社病院・看病婦学校『おとづれ』1(1): 1.
- 京都看病婦学校同窓会(1900): 京都看病婦学校畧史(佐伯理一郎). 同志社病院・看病婦学校『おとづれ』1(1): 19-38.
- 京都看病婦学校同窓会(1931): 改題の辞(佐伯理一郎). 『助産看護之友』4(7): 507.
- 本井康博(2011): 同志社人物誌104『堀俊造』医学部を夢見たクリスチャン・ドクター. 同志社時報. 132: 70-77.
- 本井康博(2016): 新島襄の師友たち～キリスト教界における交流～, 第11章堀俊造. 268-279. 京都: 思文閣出版.
- 中西裕(2009): ホームズ翻訳への道～延原謙評伝～. 42-61. 東京: 日本古書通信社.
- 岡山寧子(2010): 同志社病院・京都看病婦学校ではじめられた看護教育～リンダ・リチャーズの日本での活動から～. 京都府立医大雑誌. 119(2): 88-98.
- 岡山寧子, 竹中京子, 依田和美(2007): 京都看病婦学校初期の卒業生の看護活動を紹介した文献. 第27回日本看護科学学会学術集会講演集: 356.
- 岡山寧子, 竹中京子, 依田和美(2008): 同窓会誌『おとづれ』からみた京都看病婦学校卒業生の活動～第1巻1号から第2巻10号(明治34年-44年)の概要～. 日本看護歴史学会第22回学術集会講演集: 50-51.
- 手島恵(2016): 看護者の基本的責務: 定義・概論/基本法/倫理. 62-67. 東京: 日本看護協会出版会.
- The A.B.C.F.M.Mission, Kyoto, Japan(1893): The 7th Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses: 19-22. (同志社社史資料センター所蔵)
- 徳川早智子(1998): 同志社病院と看護婦学校(第七年次報告書). 同志社談叢. 18: 137-143.